

---

# 剣と盾

天下原

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣と盾

### 【Nコード】

N7941C

### 【作者名】

天下原

### 【あらすじ】

剣を持っている。どんな盾をも破壊する鋭い剣を。盾を持っている。どんな剣からも私を守る強固な盾を。けれどそんなものを持っていても意味がなかったんだ。私に本当に必要だったものは…。（あらすじの割にあまり本編説明できていませんのであしからず…）

## （前書き）

本人は詩のように意識していませんがそれに似たような文面になってました。読みにくかったらすみません…。

私は剣を持っている。どんな盾をも破壊する鋭い剣を。  
私は盾を持っている。どんな剣からも私を守る強固な盾を。

この二つを持っている限り私は負けない。どんな盾をも破壊し無傷で勝利を得る。

そして周囲の人々は私の元に集う。そして私はより強固な盾を得る。私は自らが王のように思えた、軍を率いて他国を侵略する暴君のようだと。周囲の状況も私にそう思わせるのに十分だった。

日が経つことに私の国は大きくなっていく。盾はより強固に、剣もより鋭く。もうすぐ世界を支配できる、そう思っていた。  
しかし…。

いくら時代が変わろうと絶対的な君主がいようと反旗は翻る。  
そして私の盾に初めて亀裂が生じた。

ある日、国に遠方の地から1人の女が移住してきた。

国に移住して来た者は初めてだったので皆その者に興味津々だった。しかしその者は誰に話し掛けられても誰とも話そうとしなかった。

それを見兼ねて私が直々に話し掛けたのだが同じく無言だった。

私はその後も何度か話し掛けてみたのだが何度話し掛けようとも何の反応も返してこなかった。

日を重ねることに私はその者に対して苛立ちを感じていった。

この国の王である私を無視し続けるとはどういうことだ。どんな馬鹿でも場を読み返事ぐらいはするだろう。

私という絶対的な存在を理解できないとでも言うのか。

周囲も飛び火を避けるように女と私に対して距離を置くようにしていた。

苛立ちを日々募らせながらも私は耐えていた。孤独に耐え兼ねてい

ずれあちらから謝罪してくるに違いない、そう思っていた。その時に奴の盾を一度壊してやろう、と。

しかしいくら待っても女は私はおるか誰一人とも話そうとはしなかった。

そして耐え兼ねた私はついに女に対して剣を向けた。

周りは巻き添えを恐れ逃げるように距離を置いた。

そしてそれを見た血の気の多い他の者も女に対して剣を向けた。数の上では圧倒的だった。その時私は勝利を確信していた。

——だが、

私はおるか誰の剣でも女を貫くことはできなかった。

何故だ？私は、最強の剣を持っているはずなのに…。

剣が効かない、それだけではなかった。

今度は次々に盾を破壊していったのだ。

その光景には容赦というものが感じられなかった。

このままでは私もやられてしまう。盾を！誰か私の盾を早く！

誰も応えない。女に盾を破壊された者、この場の光景に逃げ出す者達ばかりで誰も私の声を聞かない、いや聞けないのだろう。

私は自分の盾を必死に探した。このままでは私もあの女に…。

「教えてあげましょうか？」

後ろから女の声が聞こえた。澄んだ綺麗な声だったがそれが私にはひどく恐ろしく聞こえた。

盾を、私の盾をどこにやった！

「あなたは初めから盾なんて持っていない」

え…？何、だと…。

「あなたが盾だと思っていたものは周囲の人達。決してあなたの盾なんかじゃなかったのよ」

嘘だ…、私は初めから剣と盾を持っていた…。どんな剣からも身を守る盾とどんな盾でも破壊する最強の剣と盾を…。

「そうやってあなたは周りを盾にしてきた。あなたは他人を傷付けて自らはその他人から身を守ってもらっていたのよ」

違う！私は私の強さで、

「くだらない、とんだ腑抜けた王様ね。…もう私に構わないで。王様ごっことは他でやって」

それだけ言つと女は最後に冷めた視線で見つめ、立ち去つていった。

——私は初めて敗北を知り、全てを失った。

一度の敗北が私をここま貶めるとは思つてもみなかった。私が負けたと知った者達は手の平を反したように私のことを蔑むのだった。今まで築き上げて来た国は簡単に崩れていくのだなと呆氣にとられた。

皆にとつて私は何だったのだろう。私にとつて皆は何だったのだろう。

考えても考えても私は答えが見つけれられない。考える時間ばかりが過ぎていく。

…もう私はここにいないべきではないな。私にこの場所は…辛過ぎる。周りもいつまでも私に居られては嫌だろうしな。

そう決心した私は簡単な身支度をして帰ろうとした。

…でももう一度ぐらいあの場所によろうかな…。と、少し心が揺らぐ。

もう来ることがないのならせめて最後にあの場所にもう一度。

自然と足は帰る方向とは違う方向に向かつていた。すでに心はあの場所の情景を描いている。

この世界で最も空を近くで感じられる場所。私のお気に入りの場所だった。

その場所に付くとどうやら先客がいるようだった。誰かが先にいるのなら私は帰った方がいいだろう。今は誰にも会いたくはないし、あちらの方も私に会いたくはないだろうから。

少し後ろ髪を引かれる思いだったが私は大人しく帰ろうとした。

「ちよつと待つて」

後ろから声がした。どうやら私に気付いたらしい。振り返るべきか迷っている私に対して声の主は、

「私は気にしないから入って来ていいわよ。元王様」

私だと分かつていながらなぜ呼ぶのだろうと疑問に思いながら私は振り返り歩を進める。

そこにいたのはあの女だった。

「こんにちは、元王様。元気にしてた？」

毎日顔を合わせていただろう、元気がどうかなどわざわざ聞くことも…。

「顔色伺っただけじゃ元気がどうかなんて分からないわよ。それにあなたいつも顔伏せてるし」

私の顔など見えない方が皆気楽だと思つてな。私も…あまり顔を合わせたくない。

「それは残念。私はあなたともつと話をしたいのだけど」

話？今更話す事なんて何もないだろう。それに私は今日で国を出ていくのだから。

「それじゃあ今日限りつて事？なら今日会えて本当に良かった」

だから私は話す事などないと…。

「私と友達になつてくれませんか？」

…何だと？私と友達に？

「ええ、あなたと。きつと素晴らしい関係になれると思つんですよ」と満面の笑みを浮かべた。

こんな笑顔を見たことがなかった。

今まで女はどんな時でも無表情でそして冷めた印象が強かった。

今はそれが嘘のように感じられた。

私はこの変化に戸惑いを隠せずにした。

そんな私に女は手を差し出してきた。

握手、のつもりなのだろうか。

私はその手をずっと見つめることしかできなかった。

夕日を背にして手を差し伸べる女は私が見てきたどんな女性よりも美しかった。

（後書き）

読んでいて読みにくいと思った方：たぶんあなたの考えは正しいです。私も読んでさっぱりわかりませんから。

一応補足しますと『剣』を『言葉』（ここでは誹謗・中傷のような言葉の暴力の意）に、『盾』を『心』または『人』（集団でいることの安心感？のような意）に。そして『国』を学校のクラス、と変換すると：学園もののような話に！（：なったかな）

そのあたり意識して読んでもらえれば多少はマシになるはずですが、  
：恐らく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7941c/>

---

剣と盾

2011年1月20日02時53分発行